



和太鼓対談 生き方、死に方、おカネ、そして投資(2)

林 望 vs. 岡本 和久

先月号からの続きです。リンボウ先生こと林望氏と私は大学時代からのよき友です。二人とも同じ大学のクラシカル・ギター・クラブに所属をしていました。卒業後、彼の考え方は書籍などを通じて理解をしていました。書誌学を専門とする彼と資産運用を専門とする私との間ではほとんど共通点がないように思われますが、なぜか考え方が非常に似ている面がたくさんあると感じていました。長年、いつか彼と対談をしたいと思っていましたが、今回ようやくその夢が叶いました。水炊きをいただきながら二時間半にわたる丁々発止の会話。まるで和太鼓を両側からたたき合っているような感じでした。なぜ、おカネのイメージが悪いのか、企業経営について、寄付について、よく死ぬための「減蓄」、子どもへの投資、「臨終力」を語るなど、話題は尽きませんでした。(岡本)

林 望(はやし・のぞむ)

1949年東京生。作家・国文学者。慶應義塾大学大学院博士課程修了。元東京藝術大学助教授。「イギリスはおいしい」で日本エッセイスト・クラブ賞、「ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録」で国際交流奨励賞、学術論文、エッセイ、小説、歌曲の詩作、能、自動車、古典文学等著書多数。最新刊『旬菜膳語』(ちくま文庫)、『いつも食べたい』(同)、『謹訳源氏物語』全十巻(祥伝社)。
HP www.rymbow.com

(前号からのつづき)

おカネのイメージはなぜ悪い？

岡本 | 前回は、「3.11に思う」、「危機感が経済を発展させた」、「意外に江戸時代はグローバル化していた」、「江戸時代の経済観念」、「融通自在の日本的強み」、「おかげさまの心で永代投資」、「お金の背後にはモラルが必要」、「改革と抵抗勢力」、「アベノミクスと政治、経済」、「帰宅の





長期投資仲間通信「インベストラ이프」

時代という生き方、「グローバル化にどう対応するか」、「子どものころに開けた世界へのまなざし」、「言語を覚える」という非常に幅広い話をしました(インベストラ이프 2013年3月15日号は <http://www.investlife.jp/backnumber/123.html> でご覧いただけます)。今回はまず、おカネの話から始めたいと思います。日本人のおカネとか投資に対してマイナスのイメージが非常に強いのはどこから来ているんだろうねえ。

林 | 僕は思うんだけど、結局、どこまで貨幣経済が実効性を持っていたかということと関係があると思う。今でも農村に行くとね、農家の人たちは、みんな、都市生活者たちのようには、おカネがないですよ。でも、おカネがなくてもそれほど困らない。何故かというと、家でとれた人参と、浜のほうの家でとれた鰯とを交換してくれという、物々交換のような制度がまだ生き残っている。農産物交換所のようなところがあって、そこへ行くと、自分で作ったきゅうりを持って行って隣の奴のとうもろこしと交換する。そこに必ずしも金は介在しない。だから見せかけの豊かさと、実際の生活上の豊かさととは、一致していないところがある。まして、江戸時代などはもっとそうだったろう。そうすると結局、貨幣経済というものは都市で、なおかつ、商人と武士階級の間だけに存在する話じゃなかったのではないかと思う。商人階級と武士階級の間がどのような関係であったかと言うと武士は借りる一方、生産しないからね。商人は貸す一方。そうすると結局、借りた物を返さないとか、そういうことになってくるじゃないですか。結局、ここに賄賂だとかおカネの対価としての利権のようなものが生まれてくる。武士は金はないけれども権力がある。商人は金はあるけれども、権力がないという社会構造の中ではどうしても金というものが賄賂性を持つてくるのではないか。そうすると武士の世界から見れば、金のようなものに手を染めるのは悪い奴である。水戸黄門の悪代官になる。識字率が高い読書階級など世の中の思想をリードする人たちは武士階級と商人が主だったわけだけれど、彼らはそのような考えを持つようになった。特に高潔な武士は金などには関わらない。

岡本 | 武士は食わねど高楊枝だね。

林 | そうだね。やっぱりそれが幕末まで続いていたと思うし、明治になっても、士族とか平民というような、いわゆるヒエラルキーが保存されていた。僕の家は、田安徳川家に仕えていた士族だったのだけれど、父などは、子どもの頃、金は不浄のものだから持つてはいけないという考え方で徹底して教育されたそう。だから小学生・中学生になっても、一円の金も持たされなかったという。それは職業軍人の家で、かならずしも裕福ではなかったということもあるけれど、実際、武士は金など不浄のものは触れずに育てるといって、そういう教育的側面が強かったのではなからうか。で、お金など持つて歩くのは、「町っ子じゃあるまいし」といって、よく祖母に叱られたそうだからね。まるで江戸時代ですよ、この限りでは。そんな遺風が僕の子どものころにも残っていて、まあ、父はしがない安月給の役人だったから、経済的余裕もなかったんだらうけれど、やっぱりお金なんか持つてなかったね、小学校中学校のころ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

までは。

岡本 | うちも士族だったけれども、お年玉というものをもらったことがなかった。なぜお年玉をくれないのかと聞いたらば、あれは商人の家がするものだと言われた。うちは士族だから、そういうことはしないという。それが本当の理由かどうか分からなかったけどね(笑)。とにかく貰えなかったですよ。僕が結婚するとき妻の家に両親を連れて行った。その時に父が最初に聞いたことが「お宅は士族ですか」ということだった。妻も私も大変驚いたのを覚えている(笑)。でも当時はそういう雰囲気も残っていた。70年代の初めの頃だけだね。

林 | 確かにそれは残っていた。金はずっと持たせてもらえなかったけれど、誇りだけは高かった。駄菓子屋などには入ったことがなかった。紙芝居を見たこともなかった。「あんなものは卑しいものだから見ない」などと言って、まさに「食わねど高楊枝」を装っていた。

岡本 | 言い方を変えれば、金というものは生活をしていく上で、すごく必要なものではなかった。むしろ、生活の上澄みみたいなもので、そこに漂っているのが金だったと言えるのかもしれない。

林 | そうかもしれないね。それで友達で商店の子がいるとね、お年玉などたっぷりもらっているのを見て、本当はうらやましかった。

岡本 | 10円とか20円という話なんだけれどね。紙芝居も見たことがなかった。でも紙芝居屋はよく来てたよね。近くには行けないので遠巻きにそれとなく見るような感じだった。日本全体として金というものが非常に限界的な存在だったのだろう。ところが、80年代の後半になって突如としてみんなに金が行き渡るようになると、今度は大変なことになって節度がなくなってしまった。金の使い方ということをほとんど知らない人達が急に金を持ってしまった。

林 | うん、うん。武家の商法というのも同じでしょう。金の使い方を知らないから失敗をする。

おカネで成り立つ「ご縁のネットワーク」

岡本 | そしてバブルが崩壊して金の使い方を知らないまま社会に出た若者たちが今、子どもたちの親になっている。だからやっぱり、金に対するイメージってよくない。実はね、去年の末にアメリカの会社と提携をしたんだ。このような子豚の形をしたピギーバンクなんだけれどね。おカネの投入口が四つに分かれていて、それぞれの口から入れたおカネはお





長期投資仲間通信「インベストラ이프」

腹の中の4つの区分された部屋に入る。そして、それぞれの部屋は1本ずつの足につながっていて、足からおカネを取り出せる。4つの部屋には名前が付いていて、何に使うかのステッカーが貼ってある。スPEND(つかう)がハンバーガー、セイブ(ためる)が自転車、ドネイト(ゆずる)が、ギフトボックス、そしてインベスト(ふやす)が学帽だね。これはアメリカのマナー教育素材なのだけれど、子どもはこれを使っているとおカネを4つに分けて使うことを自然に覚えていく。つまり、今、欲しいものに全てのおカネを使ってしまわずに、少し大きいものを欲しいときはおカネを貯めていき、大きな買い物をして大きな喜びを得る。また、自分だけが良ければいいのではなく、世の中で困っている人たちのためにもおカネを使って助ける。それによって人が喜ぶと自分も嬉しいということを学んでいくことができる。さらにずっと将来、例えば大学を卒業した後、海外留学をしたいなどという夢があれば、そのためにおカネを増やしていくことが必要になる。おカネを増やすためにはおカネにも働いてもらう必要がある。つまり、ずっと将来のために必要なおカネは今すぐ必要なわけではない。しかし世の中には今すぐおカネを必要とする会社もある。そのような会社におカネを融通してあげて世の中のためになる事業を行ってもらう。社会に役立つビジネスをすればみんなから感謝をされて、その会社は大きく成長をし、利益を上げることができる。そしてその利益の一部が「おカネを融通してくれてありがとう」という感謝を込めて戻ってくる。このようなおカネとの多面的な付き合いを自然にこのピギーバンクで学んでいくことができる。ある意味、「今・自分」という小さな枠に閉じこもりがちの子どもたちの意識を時間的にも空間的にも拡大してあげることができる。その意味で、これは本当に素晴らしい教材だと思っているんだ。

林 | なるほど。

岡本 | 日本の場合多くの人が「ためる」と「ふやす」の違いを理解していない。貯めるというのは招き猫の貯金箱に500円ずつ入れているようなもので、確かに500円を入れ、さらに500円を入れれば、1,000円になる。しかし、それは増えているのではなく、ただ単にたまっているに過ぎない。ふやすというのは500円を550円にしる600円にすることだ。

林 | その区別はあまりできていないね。

岡本 | おカネとか投資ということを考えていくと、非常に大きな気づきがある。例えばおカネを例にとると一枚たった100円のチョコレートを買う。この一枚100円の中には、南半球の暑い地域で毎日毎日カカオの実をとっている人の生活費も含まれている。カカオの実を日本に運んでくる人の労賃や工場で働く人の給料、それを売る人達の生活費などすべてが含まれている。一枚のチョコレートを買うと、それによって世界中の人とのご縁のつながりを感じることができる。世界中の人たちの美味しいチョコレートを作りたいという気持ちがおカネによってチョコレートの形になっていることがわかる。また、投資とはいかに時間を味方につける



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

かということにもつながる。時間とどのように付き合っていくかと言う事はそのままのよう
に生きるかという事にも関係してくる。つまり、おカネと投資の事を学ぶと我々が「ご縁のネ
ットワーク」の中に存在していて、その中で「どのように生きていくべきか」ということを考え
ることにつながってくる。その意味では単に金銭だけの問題ではなく、人生そのものにも深
い気づきを与えてくれるものだと思う。

林 | 面白いねえ。そのような事は誰も教えていないからね。そういうなかで、実際には、昔植民
地主義の横行した時代、カカオ豆を作るプランテーションにあっては、白人は搾取するいっ
ぽうで、アフリカ人やアジア人は、単なる労働力、それもひどく劣悪な条件で働かされて、西
欧諸国の富に隷属するというような構造になっていた。そこから、このごろはフェア・ト
レードなんていって、正当な報酬を払って、アジアアフリカなどの諸国で、農場を営むこと
が、すなわち現地の富の蓄積や、教育文化、インフラの整備などに役立つようにしたいと
いう、脱植民地主義的思潮も現れてくるわけだね。最近では、チョコや珈琲豆などを買うので
も、僕などは、もっぱらこのフェア・トレード製品を買うように心がけてるけど。すべてはお
金という「仲立ち」を介して営まれていくんだということ、そこには当然、モラルというものが
なくてはいけないことなどを学ぶのは大切なことだね。

岡本 | そう。でもそれをしっかり教える事は日本をこれから強く元気にしていくためにも必要なこと
だと思う。僕は中学や高校で出張授業をしているけれど、子どもたちに話をすると、
本当にしっかりと理解してくれる。結局、話をするとあげると、問題が
あるのだと思う。バブルが崩壊して以降、厳しい環境の中で社会人生活を送ってきた親た
ちではなかなかおカネの良い面の話がしにくいのかも。ある意味、退職をした高齢
者の人たちは社会人生活の半分は経済成長の時代を生きた。だから、今は彼らの本当の
出番かもしれないし、それはまた責任かもしれない。

林 | そうだね。つくづくお金というものは、それ自体が悪いのではなくて、モラルのない使い方
をするところに問題があるわけだからね。そこを、なんとしても教育していかななくてはなら
ないな。

現代の「三方よし」とは？

岡本 | そしておカネが介在する商売というものも「我も良かれ、人も良かれ」という発想で捉えられ
るようになる。近江商人は「三方よし」という事を言っていたが、最近、私はそれでは足りな
いのではないかなと思うようになってきている。現代の社会は生活者が消費者として、従業員
として、投資家として企業と関わりを持つようになってきている。その意味では、生活者がそ
のまま企業の総体と等しいとも言える。そのような構図の中で見ると、例えば投資家があま
りに高いリターンを要求するならば、企業は値上げをして消費者を犠牲にしたり、リストラを



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

して従業員を犠牲にしたりすることにもなる。結局、生活者＝企業が全体としてどのような最適化を図るかという問題になってきているのだと思う。さらに、生活者＝企業が3つの面で責任を負っている。1つは命よし。あらゆる生きとしいける者の命を大切に作る社会を作る必要がある。次が地球よし。環境が保全されてこそ人類もこの地球で生きていられる。最後が未来よしです。我々の子孫たちがよい生活を送れるような基盤を我々が今構築する必要があると思う。これが現代的な三方よしではないかと考えている。

林 | つまり、子孫にツケを回さない。私もそれは全く同感なんだよね。例えば、原発などというものを考えるとやっぱりよろしくないよね。死の灰がどんどん溜まってしまう。それが地球を破壊して子孫の命も危うくしてしまう。まずは、そういうリスクを極小化するなかで、未来を考えると「志」があらまほしいね。目先の欲得にとらわれるのでなしに。

岡本 | このような現代的な三方よしの観点から見ておかしいと思う企業があれば、まず消費者としてそのような企業の製品は買わない。また、投資家としても企業トップに手紙を書くなりして声を発する。さらに、従業員としても唯々諾々と上司の言うことに従うのではなく、おかしいと思ったらおかしいという。そのような態度が、実は日本を、世界を良くしていくことになるんだと思う。もっと生活者が声を出していくのが欠けている様な気がする。損得でしか物事を見ていない面があるように思う。

林 | でもごく片隅ではあるけれども、従来の経団連などに所属をしていない人たちが割合に突き抜けた考えを持ちつつあるようにも見える。あえて言えば、今の大手企業のタヌキオヤジのような経営者を見ていると本当にこの国はこの人達に任せていて大丈夫かという気がしてくる。未来はないと思うんだよね。昔の経営者は土光さんなどを見ても、もっともっとすごい人がたくさんいたように思うんだがね。ほら、あの別子銅山を再生し、日本の環境問題を先取りした伊庭貞剛なんて人は、実に立派だったね、ああいう自己の欲得を度外視して、ほんとうに未来のため、子々孫々のためを考えて経営する、それがひいては投資家のためにもなり、国もためにもなる、とそうあってほしいなあ。あんな経営者が、一人でも二人でも今いるだろうか。いや、いるに違いないとも思うんだ。そういう世のため人のための陰徳を積もうとする経営者たちもね。ただそれが主流ではない。主流は「金もうけ原理主義」の人たちのように見えるところが情けないな。

岡本 | 金もうけは本来、どれだけ、世のため、人のために貢献できたかの成績表のようなもの。そのためには本当に額に汗をして事業をする必要がある。逆境に負けない経営が必要だ。円高で苦しいからなんとかしてくれと政府に言う。でも円高なら円高でできることをするのが経営者ではないかと思う。そして円安になったら、円安でできることをすればいい。ビジネスに楽な環境を作ってくれるのが政府の役割という様な考えを持ってはダメだ。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

企業経営について

林 | 政府が何とかしてくれるのが当然だという意識があるのかもしれない。僕は最近ね、面白いなと思っているのは、富士フィルムね。富士フィルムのホームページを見ると、デジタル化の中でフィルム産業がダメになった。その中でどうやってこの会社を存続させていくかということをしごく考え抜いたのではないかと思う。ホームページを見ると、いかにして自分たちが世のため人のための製品を作っているかをしごくアピールしている。あれはこの時代を象徴している会社かなと思う。

岡本 | 富士フィルムの例でも分かる事は一つの技術が底流として伝承されており、そこから時代に合わせた色々な異なった商品が生まれているということです。元々は青い目をした人形などのセルロイドを作っている大日本セルロイドだったわけだ。それがフィルム事業に進出して、そこで培った塗布の技術を持って、オーディオ、ビデオ、テープ、フロッピーディスクなどに入っていった。フィルムの延長線上でカメラに進出、さらにコピーなど OA 機器にも参入。デジタル化が進むにつれてデジカメなどに進出して生き延びている。さらに、フィルムで使ったカラーゲンをベースに、化粧品ビジネスにも入っている。一貫した技術のベースがあって、それに基づきながら、世の中のために役立つ商品を出しているというのは見上げたものだと思う。

林 | それが本来の企業というものだと思うんだよね。時代というものは必ず変わっていくものだから、老舗だと言っても、ずっと室町時代から変わらないまんじゅうを作るのもいいけれど、やっぱりどうやってその技術を時代に適合させていくかということをし、先取りして考えていく、また思い切って転換すべきは転換するというのも経営の見識だと思うよね。

岡本 | その時にその基礎となる技術をどのように定義付けるか、まあ、今風にコアコンピテンスが何であるかという定義の仕方が非常に難しいと思う。例えば長い歴史を持つ虎屋を見てもそのコアとなる技術は何なんだろうと考えてみる。小豆を使った食品なのか、和菓子なのか、あるいは甘味食品なのか、はたまた和食なのか、食品全般なのか。その定義の仕方によって、ビジネスの広がりが規定されてくる。ただ広ければいいかといえばそうではなくて、広すぎると逆に強みが薄れてしまう。しかし、あまりにその範囲を狭めると、発展の可能性が制約されてしまう。そのバランスの取り方が非常に難しい。強みをどこに置いて、それをどのように時代に合わせていくのかというのが企業のあり方の鍵なんだろうね。

林 | 優れた経営者というのは、そのような事を理解して先が見える人なんだろうね。不思議なものだと思う。そのようなビジネスの感覚、経営者としての考え方などはやはり小さい時からおカネや投資に対してどれぐらい意識を向けていくかということにも関係してくると思う。そうそう、一つ思い出した。僕は若いころ、慶應の女子高の先生をやっていたことがある。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

そこは、ほんとに日本のお金持ちの子女たちが雲霞のごとく集まっているといってもいい学校だったけれど、その教え子の中に、さる超有名企業のオーナー族のお嬢さんがいたんだよ。ところがね、修学旅行などを引率しながら、見ていると、その子は、毎日使ったお金をきちんきちんと出納帳に付けてるわけ。ははあ、この子の家は、ほんとに家庭教育がしっかりしていて、お金に対してもちゃんとモラルを教えるんだらうなと、床しく思ったことを今もはっきりと記憶しています。今、その子がどうしてるか、知らないけれど、きっと立派な女性になっていることと思うね。つまり、それが育ちの良さってことでさ、やっぱりきちんと金の使い方ということ、骨身に徹して教えなくてはいけない。その意味ではこのピギーバンクは面白いと思うねえ。

ハッピー・マネー・ピッグとの出会い

岡本 | これはアメリカでは4歳からのマネー教育の素材として使われている。4歳というところがすごいよね。全米ですでに100万個販売したと言っていた。4月から日本で発売を開始するけれども、これが少しでも日本の子どもたちの意識改革につながってくればいいなと思っている。そしてその子たちが20年か30年後に日本経済を中心的に担う時にその効果が本当に発揮されることになればいいと思っているんだ。まあ、長期投資だね(笑)。

林 | どうしてこの商品を取り扱うことになったんだい

岡本 | 実は2、3年前にサンフランシスコで古い友人とランチをしていた。その時に彼が「SAVEとINVESTってどう違うんだい」と言う質問をしてきた。「なぜ、そういう質問をするの?」と聞いたところ、子どもに買った貯金箱におカネの投入口が4つあり、SAVEとINVESTが分かれていた。それで疑問を持ったんだって言ったんだね。それで興味を持ち、製造元の企業を探りあて、そこの社長に面談を申し込んだ。昨年5月にシカゴでミーティングを持ち、7月には彼らのオフィスで3日間たっぷり使って彼らの企業理念や製品を紹介してもらった。そして、年末にかけ、契約作業を進めるとともに、こちらサイドで販売体制を整えた。そして、ようやく今、販売ができるようになった。やっぱりおカネの輸出入と違って商品の輸出入は本当に大変だなというのが身に染みて分かった。アメリカというとウォール街的な強欲さがすごく目立つけれど、この会社のあるシカゴは穀倉地帯だ。その意味ではウォール街とは全然、メンタリティが違う。むしろ日本人などに似ている農耕民族的な穏やかなおカネとの付き合い方を推奨しているという点でとても深く共感することができた。

林 | どうなんだろうねえ、僕らの立場から見ると、アメリカ的な資本主義というのは非常にあざとい面があるように思う。人を騙してでも金だけ儲けて、取るだけ取って、逃げちまおうと言う、そういうのが色々な金融危機を引き起こしている元凶だろうと思うが、ああいうことに対して、アメリカの経済界はもう少し自制しないといけないという方向にあるんだろうか。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

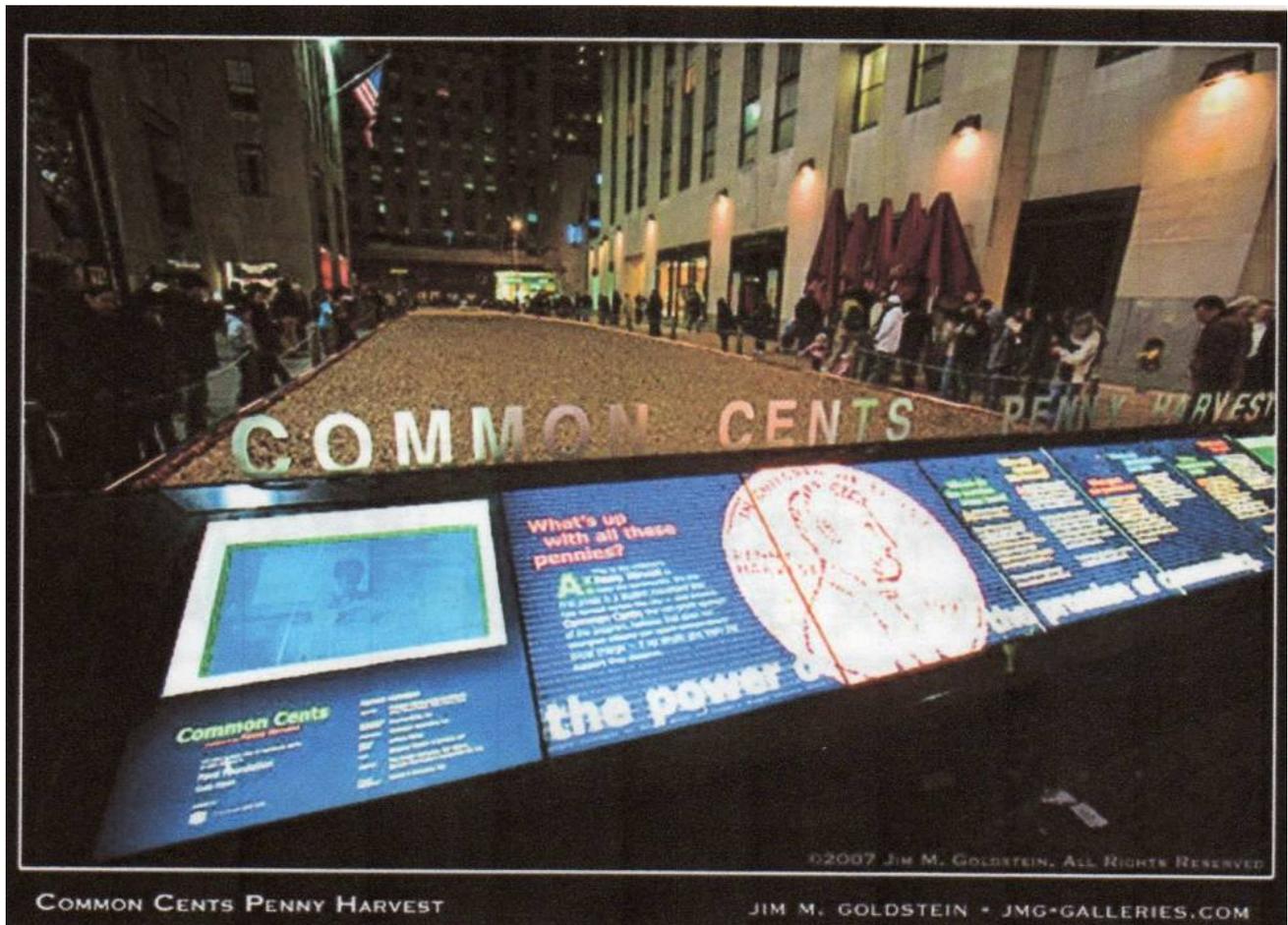
岡本 | そうだね。やはりウォール街のモラルは少しおかしいと言わざるを得ない。僕が所属するグローバルな証券アナリストのプロフェッショナル団体であるCFA協会も金融業界のモラルということ非常に大きな問題としてとらえている。ただ、またアメリカの中にもこの会社のようにまともなおカネとの付き合い方を広めようとしている会社もある。全体から見れば小さいかもしれないが、ある意味、自浄作用が働いているのかもしれない。ウォール街の問題は格差が拡大したというよりもカネ余りの中で、自分たちのよいようにやってしまったということだと思う。

寄付と「おカネが運んでくる笑顔」

林 | ドネーション(寄付)などという考えはやっぱり教会の中で帽子が回って来るというところに関係があるのかもしれない。僕の娘婿はアメリカ人で牧師だが、今、バージニアの片田舎にいる。子どもの教育を考え、横田基地の近くの教会に赴任をしてこようと運動をしている。多分、そうなるだろうと思うのだが、どうやって生活費を稼ぐかという全部、教会からの寄付だ。それは横田基地の教会で、信者たちが寄付するのではなく、アメリカ全土、同じ宗派の教会をめぐって毎月一回ずつ寄付をしてくれと言って、それを何十件も集めて収入にするんだそうだ。言ってみれば、教会を網羅したインターネットのようなもので、すごくネットワークが発達している。アメリカのキリスト教をメディアとする相互助け合いネットワークっていうのは非常に強いものがある。

岡本 | 確かにこのピギーバンクの教材を日本語に訳そうとしていると非常に難しいものがある。例えば寄付について「君たちのお父さんやお母さんに聞いてごらん。どこかの慈善団体に所属しているはずだから」というような記述があり、これをそのまま日本語に訳してもどの程度、意味が通じるか分からない。また、子どもだっておカネが稼げるということで、ご近所のお年寄りのペットの散歩をしてあげてお小遣いを貰うというようなことも普通の事として書かれている。おそらく日本だと、そのような風習は非常に例外的だと思う。場合によっては「うちはそんなに困っていません！」などと子どもの親からクレームが来るかもしれない。「余計なことしないでください」とね(笑)。その辺の文化はかなり違うことを実感しましたね。もちろんカルチャーの違いというのは大きいと思うけれども、ただ日本の場合、基本的におカネというものに対する考え方、イメージがあまりに悪いということも事実だと思う。これを修正していかないと、今の世の中で世界の中で日本はなかなか強くなれない。これは現実なんだからね。

林 | そうだね。



岡本 | アメリカにペニー・ハーベスト・プロジェクトという運動がある。子どもたちが自分たちのコミュニティの問題点などを話し合い、夏休みをかけて、ご近所から1セント(ペニー)ずつの寄付を集める。ひと夏かけて6,000万円相当の金額が集まり、この写真のようにニューヨークのロックフェラーセンターの前の広場が1セント玉でいっぱいになった。その後、子どもたちがみんなで話し合い、その資金をどこにどのように振り分けるかを決めていった。日本でも、林さんのお父上が会長を務めておられた日本フィランソロピー協会がこの運動を推奨しており、現実にはいくつかの中学でも行われているようだ。

林 | へー、それはすごい。う～ん。

岡本 | このパンフレットを見てほしい。これはミュージックセキュリティーズという会社が行っている被災地応援ファンドの紹介パンフレットだ。1万円を出すと5,000円は寄付となり、残りの5,000円は出資金となる。震災ですべてを失った人たちに資金が届く。寄付と出資金で将来事業が復興すれば、その時は出資金に見合った投資収益を得ることができる。このみんなの笑顔を見てほしい。この写真は実は震災からほどなくして撮られた写真だと聞いている。これを見ていると本当におカネというものの素晴らしいパワーを感じる。もちろん大切な



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

は金額ではなく、そのおカネの裏側にある、みんなの「応援したい」という気持ちだろう。結局、おカネと心というものが分断されず一緒に付いてまわっているところに、このような笑顔を生み出すカギがあるんじゃないだろうか。本当はこういうのが寄付なのだろう。赤十字などの大きな組織に寄付をして、その組織が適当に配分を決めるというのも、それはそれで大切だとは思いますが、もっと個人の気持ちを込めた寄付の行動というのがあっていいように思う。

セキュリテ被災地応援ファンド 募集中



セキュリテ被災地応援ファンドの特徴

- ① 応援したい企業を、自分で直接選ぶ
- ② 半分寄付、半分投資
- ③ 長期的に復興に関わり、見届ける

1口 ¥10,500

5,000	+	500	+	5,000
出資金		手数料		応援金

(セキュリテ被災地応援ファンドのちらしより、

http://oen.securite.jp/_common/pdf/oen_fryer20120807.pdf)

林 | 本当だねえ。この写真の笑顔は驚きだ。今回の被災地への義援金なども、本当に動きが鈍くて、しかも使い方が官僚的に硬直化しているものだから、本当に必要な人に必要な金が届いていないきらいがある。だから、こういう運動があることを、マスコミなんかも、今の百倍も千倍も報道し、プロモーションに協力して、「なんとか手元のお金を被災地の人たちの役に立てて貰いたいんだけど、赤十字に寄付して、どこへいってしまうのかわからないのは嫌だ」という人たちに対しての・・・そういう人は相当に多いはずだと思うけど・・・受け皿にしてほしいな。僕自身も、そういうことだったら、よろこんで義捐に応じたいさ。あ、そうそうもう一つ思い出した。じつはイギリスの大小さまざまの企業が、イギリス商工会議所みたいなところの呼びかけで、大震災への義捐プロジェクトを始めてね、僕はその呼びかけ人の一人でもある。このプロジェクトの面白いところは、直接に金を集めるのではなくて、多くの人



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

に「本を提供してください」と呼びかけるわけ。で、その本を現地に送るのではなくて、これをしかるべく古書店に売却して、それで得たお金を、現地に送金するというシステムになってるんだね。大抵、読んでしまってもう要らないなんて本は、どの家にもあるから、それを始末することと、震災支援を一石二鳥でやろうという面白いアイデアです。そういう風に、寄付、ドネーションといっても、ただ日赤にお金を送るだけでなく、いろいろに工夫をして、さまざまな形で、世のために役立てるといふ精神が大切だね。

岡本 | よく世の中では「貯蓄から投資へ」ということを言う。でもこの写真などを見ていると、むしろ「寄付から投資へ」と言った方が良いのかもしれないと思う。貯蓄から投資というのはより安全なものからリスクの高いものへ動かそうという話でしょう。逆に寄付という気持ちを届けるものから、投資によって応援するという気持ちを届けると同時に、その成果として利益の分配にも預かれるかもしれないということの方が、本来の投資という意味では正確かもしれない。間に大きな団体が介入してしまうと自分のおカネがどこに行ってしまうのかわからない。そのために気持ちを込めようにもなかなか思いが伝わらない。同じことが、銀行の預金にも言える。銀行に預金をすると、銀行がどこにそのおカネを貸し付けるかを決める。預金者にはその貸付先を指定することができない。しかし、株式や債券を買うときには、どのような気持ちでどの企業を応援したいかということをはっきり反映させることができる。寄付も投資も気持ちを届けるという意味ではもっと直接的な行動が必要なんだろうね。

林 | それが本来なんだろうね。ただ、そこにおいて行政や業界団体などが介入してくると話がややこしくなる。結局トラスト活動などもう一つ盛り上がらないのはその辺にも問題があると思う。

岡本 | 確かに、中にはとんでもない奴もいるので、ある程度の監督は必要だと思うんだ。自由な発想で良いことをしようとする活動まで制約をされるようになると、それは大きな問題だ。

「減蓄」を目指そう

林 | 今、私は思うんだけどね、「減蓄」ということが大切になってきている。いままで貯めてきたものをどう減らしていくかということだね。いつも思うことはどうやって財産を減らすかということなんだよね。

岡本 | ああ、貴兄の「臨終力」に書かれていた「良く死ぬ」ための六項目のひとつね。

良く死ぬための六項目

1. 人生を直視し応戦する
2. 心に北極星を持って生きる
3. 世間への恩返しを考える
4. 最後の瞬間まで健康に生きる
5. 60歳を過ぎたら「貯蓄」よりも「減蓄」
6. 自分の終末をイメージしておく

林望著、「臨終力」KKベストセラーズ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

林 | そう。僕の場合、財産といってもおカネはあまりない。しかし、本などがたくさんある。本だって、相当な資産価値にはなっている。僕が死んでしまったら誰もその価値は分からないで二束三文で売られることになるかも知れない。僕が生きているうちに売るとなればいい加減なことではできない。出入りの神田の古本屋に頼んで市に出してくれと頼めば良いのだが、正当な価格で出さなければこっちが「うん」とは言わない。シロウトを騙すようなわけにはいかない。そうすると大切なものから売ることになる。「断捨離」などといって大切なものを残してあと残りを処分するというようなのはしみったれた考えだ。私に言わせれば、タバコを止めるのに少しずつ止めるようなもの。一番大事なものを処分していき、最後に死ぬときはどうでも良いものしか残っていない、そういう死に方をしたいなあと思う。だけれども、どこからリタイアするのが分からない。必要なものを売ってしまうわけにはいかない。こういう商売なので本がなければ書けないことも多い。どの時点で始末をするか、いま、慎重に思案を巡らして、最も適切な方法で、最も適切なところに売却したいと、考えている。それは、一種、お金の投資先を考えるのにも似てるね。この本を本当に必要としている人の手に渡るように売りたい。次の所蔵者が、よろしく整理活用して、学問の進展に役立てるなり、多くの研究者に公開するなりして、それを売ったことが、世のため人のためになった、とそういうふう to 売りたいと思ってるわけだね。

岡本 | 僕はそんなに高い本を持っているわけではない。しかし、歴史的にも学術的にも実務的にも非常に価値のある本はたくさん持っている。しかも、もう廃刊になっているのも多い。その多くは安い値段で古本屋で買ったものだ。一般的には単なる古書だから、それを売っても安いものだろう。しかも、散々、赤線などを引いてしまっている。しかし、古本としての価値はなくても、この分野を研究している人には価値がある。一番良いのは私が研究している分野に興味を持つ人に贈呈するのが一番いいと思っている。でも、いつ、それをあげてしまうか。それは林さんと同じ悩みだね。

林 | そうなんだよ。この間、父が亡くなった。膨大な量の経済関係の本を遺した。しかし、それは私にとってはほとんど意味がない。売ったって二束三文だ。恐らく書庫一杯売って20何万ぐらいなものだろう。と、言ってそれを置いておくわけにもいかない。場所を取るからね。自分の本だって始末したいのに。そのような矢先にね、父の記念館のようなものを作りたいという人が現れてね、本のすべて一括して東北福祉大学に寄付したんだ。その後、古い写真なども本当に手元に残しておきたいものを選んで残りはすべてそちらに渡してしまったよ。そのような形でどこかに引き受けてもらうというのも「あり」なんだけど、これも死ななければできない話なんだよね。いつまでも今のような生活ができるとはとても思えないわけで、いまは収入もあるが経費もたくさんかかる。言ってみればある程度の大きさの自転車操業のようなもの。これがどこかで、病気でもすると急に回らなくなる。そうすると今の家には経費がかかって住んでいられなくなる。そうなってくると、どうやってダウンサイズしていくかということが非常に大きな課題になる。老後というものにどう向かっていくか、非常に難しいもの



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

がある。岡本君が言うように「死はリスクではない、いつまで生きていられるかという不確定性がリスクだ」というのは全くその通りだ。死だけではなく、病気もそうだよ。病気だってどうい病気になるかわからない。例えばがんなどはある程度早期に発見していればそう急に死ぬわけではない。

岡本 | その意味で、がんはありがたい病気だ。

林 | しかし、これが脳梗塞だとか、動脈瘤の破裂などだと、あっという間に死んでしまう人もいる。突如として脳出血して、あとは半身不随で仕事ができなくなると、ものすごく経費がかかるのに収入が途絶える。そうなった時に困らないように何か手を打たなければいけない。それはすごく思うね。ところがこれという方法がわからない。父はバブルのころ節税のためにマンションなどを買って持っていた。確かに節税効果はあっても、買ったのがバブルのころなのでコストが高い。あの頃は頭金など5%ぐらいで残りはほとんどローンだった。金利も7%ぐらいだった。その高金利がずっと続いて生きていた。この低金利の時代に7%金利を払っていたんだよ。当時、2000万円ぐらいのワンルームマンションなども幾つかあった。なぜか、父の貯金が減ってしかたないんだよね。年金もしっかりもらっているのに、なぜ、こんなに減るんだろうと思って調べてみたらそれを発見した。父は経済人だったからあまり口を出すのも良くないと思っていたのだが、なかにはちょっと老人目当ての詐欺的なものもあった。父が亡くなったときには3000万円以上のローンが残っていた。そのローンで買ったマンションを全部売っても、このデフレ時代の、しかもかなり古いマンションでは、1000万円にも満たない。人がそのマンションを賃貸してくれていればまだ賃料が入る。しかし、この少子化時代で、しかも古いワンルームマンションなどなかなか入る人がいない。結局、空き室ばかりになってしまっていた。家賃も入らず、ローンの返済に追われるのはとてつもなく大きなリスクだと思い、とにかくマンションを手放し、蔵書などもカネになるものは換金してローンの返済にあて、それでも残ったローンは私が引き受け、それを完済したところなんだよ。老後に向かって何が怖いと言って借金ほど怖いものはないね。

岡本 | 自宅があるのならリバース・モーゲッジなども検討の余地があるかも知れない。商業銀行や都市部自治体などがやっているが、ひと口に言えば所有する不動産を担保に融資を受け、死亡時にその不動産を売却して一括返済する仕組みのことだ。生きている間は年金のように借金として受け取る。そして、契約満期または死亡時に一括返済するのだが、現金で返済できない場合は、担保となっている住宅を売却してその返済に充てるという制度。調べてみたらいいかもしれない。

林 | そういう制度があるの。知らなかった。ただ、夫婦二人で暮らしている場合、二人がいつ頃に死ぬわけではないから、そのタイミングがどうであるか、ということも、いろいろな問題を含むね、それは。ぜひ調査してみましよう。良い話を聞かせてくれてありがとう。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本 | まあ、どうやってダウンサイジングしていくかという時、一番難しいのはそのスピード感ですよ。おカネにしたってそうだ。「俺は平均寿命まで生きればいい」と思って全部、資金を使っ
てしまっても100歳まで生きるかも知れない。そうしたら悲惨だからね(笑)。と言って全然使
わないでじっとしているのも面白くない。何のために働いてきたのかわからない。

一番良い投資は子どもに対する教育

林 | 一番良い投資というのは子どもに対する教育だということを、何冊かの拙著の中に書いた
けど、ある時期がくると歳をとって、自分だけではどうしても立ち行かなくなる。そうなれば
子供たちに「頼んだよ」というより仕方なくなってしまう。

岡本 | 「親の面倒をみろ！」と押し付けるのではなく、成長の過程で親の世話になったことを感謝
するように育てていくことが必要だろうね。真の教育というのは、その子が人生最後の時に
「ああ、いい人生だった」と思えるようにしてあげることだろう。

林 | それは全くその通りだ。そのような教育をしていけば自然に親から始まり世の中全体に対す
るご恩の心が湧いてくるだろう。

岡本 | 教育と言え、最近のいじめとか体罰についてはどのように考えているの。

林 | 僕はね、体罰という言葉で何でもかんでも含めてしまうのは大きな間違いだと思う。アメリカ
の娘の家など見ていると、子どもがあまりわがままなことを言ったり、規範に外れたことした
りして、注意しても聞かないときなど、「ちょっと来い」と言ってお父さんがお尻を叩く。スパン
キングというやつだね。子どもたちにはそれがすごく怖いから言うことを聞くんだよ。これ
は本当に善意でやっているのだから決して傷つけたりすることはない。そういうのが体罰であっ
て、僕はそれを必ずしも悪いとは思わない。もっとも、僕自身は、全くそういう体罰もない家
で育ったので、自分たちの子育ての中では、一回も子供たちに手を上げたことはないけど
ね。全く平和裏に子育てをできたのは、まあ子供たちがおとなしかったせいもあるから、一
概には言えないけどね。ただ、今、問題になっているのはありや、暴行で体罰じゃない。暴
行と体罰を一緒くたにして論じている部分があると思う。

岡本 | また、子どもに対する時、アマチュアのスポーツ選手に対する時、プロの選手に対する時も
すべて違うと思う。許容される度合いがね。相撲の世界に入って一切、相手に力を振るわ
ないということはある。土俵にぶん投げられるのが体罰かと言えそうじゃないだろ
う(笑)。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

- 林 | 例えば柔道などでも「かわいがる」というのがある。乱取りで気絶するまでしごく。それは体罰かというのと何とも断定しにくい。長嶋茂雄の修業時代にも、あの砂押監督の暁の千本ノックなんてのがあったじゃないか。『巨人の星』の大リーグ養成ギブスとかね、ああいうのだった、いわば「境界領域」でさ、ひと口に体罰と言っても状況を良く精査することが必要だ。
- 岡本 | いじめの場合、僕がすごく思うのはもっと親の責任が問われるべきだと思う。もし、アメリカであんなことがあったら、親はすぐに転校させるだろうね。
- 林 | そりゃそうだ。いじめられているのを知っていて、漫然と同じ学校に通わせておくというのは、一種責任放棄ともとれる。
- 岡本 | 私は欧州の親の意識はあまり知らないけれど、少なくともアメリカでは子どもを守るのは親の責任だとみんな思っている。不幸にして子どもが自殺に追い込まれるまでその状態を放置しておくのは理解できないね。まあ、これは色々反論はあるかも知れない。でも、不幸なことが起こってから「もっと早く学校が手を打ってくれるべきだった」という。それは一理あるにしても、子どもを守る最終的な責任は親にあることをもっとしっかり認識してもらいたい。
- 林 | 僕がいつも言うことはね、学校にできることというのは極めて限られているということだ。なぜなら、時間を考えたって学校にいるのは9時から2時とか3時まで、せいぜい5時間程度だ。残りはプライベートな生活になる。家にいる時間は10～12時間。それを考えても、どちらが自分の子どもの有りように責任を持つかと言ったら、家庭の責任、親の責任でしょう。もし、僕の子どもにそのようなことがあったら直ちに転校させるなど手を打ちますよ。
- 岡本 | 警察に連絡するとかね。それでも効果がないなら学校を替わる。それは子どもの命を守るために当然のことでしょう。でも、不思議なのは関西の学校でいじめによる自殺者が出て、入学試験をやめさせるという話が出たとき、受験生がまるで被害者のような発言をテレビなどでしていたことだ。そんな危険な学校は当然、抜本的対策が講じられるべきでそれまで新入生を入れないというのは、子どもを守るという観点からも理解できる。しかし、その当事者である子どもは確かに被害者であることは事実だが、「夢を壊さないでほしい、受験をしたい」というのはどうも良く理解できない。
- 林 | アメリカはちょっと行きすぎの面があるけど、もし、あのようなことがアメリカで起こったら恐らく学校はつぶれるよ。たくさんの訴訟が起こり、何十億という賠償金を払うことになるだろう。だいたいほとんどのケースで原告が勝つ。日本だと7000万円の損害賠償を請求して判決は250万というようなことも多い。どちらがいいかという問題だけれども、日本の司法は、普通の人の常識から見て、かなりおかしいところがある。法律のための法律解釈というか……。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

あの完全に構成要件が揃わないと「危険運転致死罪」が適用されないなんてのが、その良い例だね。無免許運転ながら、相当に習熟していたので、危険運転ではないなんてさ、法律家のタワゴト、屁理屈としか思えないよ。もっと被害を受けた人の立場に立って法律が守ってくれるのでないと困る。アメリカはやや行き過ぎだけれど、日本は逆方向に行き過ぎだ。

岡本 | 僕はね、9年間いたニューヨークから日本に帰ってきて驚いたことがある。アメリカ生まれでアメリカの学校に行っていた娘が日本の学校に行き出したとき、公道を通過して学校に行くことが普通に行われていること。アメリカではまず考えられない。親が連れていくか、スクールバスがピックアップしてくれるか。帰国後、最初のうちは通学途中で何が起こるか心配でしかたなかった。



こんなこともあった。妻が子どもと手をつないで道を歩いていたらベビーシッターに、手をつなぐのではなく、「子どもの手首をつかみなさい」と注意されたというんだね。なぜかという手をつないでいるだけだと子どもが手を振り切って車道に飛び出す危険がある、腕首をつかんでいれば手を振りきれないので安全であるとね。事ほど左様に子どもに対するリスク管理に親が気を配っている。

林 | なるほど、それはそうだ。紐で結んでいるようなものだね。僕はねおかしいと思うのは、よく熊が出るとか、殺人犯が出没するとかいう危険があるときに子どもたちを集団で登下校させることだ。集団登下校などしたら一網打尽でやられてしまうのではないかと思う。やはり分散して親が管理することが必要だろう。問題は集団登下校という所までしか思考が及ばず、危険なので親に必ず迎えに来て下さいということがないという点だ。

岡本 | 学校としても親にそのように言えないんだろうね。親は子どもの安全は学校が守ってくれると思っている節がある。子どもは学校が守ってくれる。大人は会社が守ってくれる。会社は国が守ってくれる。そして日本という国はアメリカが守ってくれると思っている(笑)。その意味ではかなり人任せの部分大きいと思う。日本全体がそのような構図の中にどっぴりと漬かってしまっている。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

林 | 寄らば大樹の陰じゃないけどね。

岡本 | 常に、より大きい組織に「おんぶにだっこ」の状態になっている。

リスクな時代の自己責任

林 | こういう時代になってくるとリスクがいろいろな意味で増大しつつあると思う。犯罪が異常に増えている。海外の犯罪組織などがどんどん裏社会に入ってきている。麻薬の販売組織なども増えている。そういう状況の中で、犯罪もグローバル化してるということだ。牧歌的に子どもが学校に向かって「バイバイ」と出かけていくので本当に大丈夫なのか。そのような保証は絶対ないだろう。イギリスでは、小学校を終えるまでは必ず親が送り迎えするという法律がある。それぐらいのことをやらなければいけない。イギリス人にできて、どうして日本人にできないのか僕は不思議でしようがない。色々な要素があると思うけれど、一つには社会が大きすぎるということだね。東京なんかだと、親は八王子に住んでいて、会社は丸の内にある。そうすると、両親が共働きで、2人とも丸の内に勤めていて、子どもは八王子の学校に行っているとする。そのような引き裂かれた状況がある。そして、何かあったときに親は責任を取り切れない。イギリスの場合、ロンドンなんかだと通勤時間は普通30分ぐらいだ。そうすると例えば子どもが下校の時間になる。夫と妻は交代で子どもの迎えに行く。その時間になると会社に「子どもを迎えに行くから」と言うことで中座して出かける。そして、帰ってきてまた仕事を続ける。そのようなシステムが確立している。どうして西欧の先進諸国でそのようなことができて、日本でできないかというのが不思議でしようがない。その意味では日本は思考停止状態だと思うね。何か無条件に江戸時代と同じように四里の山道を歩いて通うのが美德になるように思っている。

岡本 | 薪を背負ってね(笑)。

林 | 二宮金次郎の時代はそれでいいんだけどね。そんな事していたらどんな目にあわされるかわからない。やはり、いじめの問題などもずっと繋がってくるけれども、責任を誰が取るかという「誰も責任を取らない」という点が日本社会の一番悲しいところだ。原発事故を考えてみても、誰も責任を取っていないでしょう。あれアメリカでやったら絶対、電力会社のトップが牢屋に入ってますよ。完璧に。ところがトップはのうのうと退職金をもらって悠々自適してるじゃないですか。

岡本 | そういう意味では厳しさが足りない。韓国だって金融不祥事でもあれは経営トップは何十人も獄に入る。日本ではホリエモンぐらいなもんだ。ちょっとそういう風な厳しさが欠けている。例えば不祥事が起こっても名前を明かさない。はっきり名前を出して責任を取ればいい、自分でやってしまったんだからね。妙にそのような人をかばう事が美德であるかのごとく行



長期投資仲間通信「インベストライフ」

動し、繕いながら、実は責任逃れをしているような感じさえ受ける。

林 | 加害者のアドバンテージが非常に大きい。

岡本 | だって自分の子どもを手にかけてた親が数年で刑期を終えるでしょう。本当におかしいと思うよね。

林 | 昔の刑法には尊属殺人って罪があったよね。子が親を殺すと罪が重い。ということは、親が子を殺しても罪は軽いということです。こんな「伝統」が、そこはかとなく生き残っている気配があるね。子どもというものは、自分の所有物か何かのようなね、そんなことなんでしょう。無理心中かなんかで子どもを殺して自分も死ぬつもりだったというような形をとっているんだけどね。確かに同情すべき場合もあるけれども、大体的場合はそうとは言えないだろう。炎天下の車の中に赤ん坊おいて、自分はパチンコをしていて、子どもが亡くなる。その親の犯罪が罪に問われたとしても、せいぜい6、7年でしょう。そんなのは過失ではなくて、れっきとした殺人です。

岡本 | 親が監督するというのは義務であるという点が理解されていないように思う。

林 | 義務ですよ。

岡本 | そういう意識が少なすぎる。

林 | 少子化、少子化といっても子どもはそういうことで命の危険にさらされているのを黙視しているのだからね。いじめ問題や虐待問題でも相談所など何も役割を果たしていない。

岡本 | 家庭のあり方という点で言えば林さんが「節約の王道」で紹介をしていた橘曙覧の「独楽吟（どくらくぎん）」あれはいいですね。あそこにあるような何かほのぼのとした知足の世界というか本当に幸せな家庭の生活が失われているような気がして仕方がない。

林 | いいでしょう。あれは全部で52首ある、そのどれもいいですよ。ただ、あの人はあの歌だけがいいんだよね。他はあんまり大したことはない(笑)。幕末に近いところに生きた人で明治になる直前に亡くなっている。まあ明治になって新しい世の中を見ないで幸いだったかもしれない。どの句のみんな、ほろっとする。

岡本 | 先日送った「辞世の川柳」もなかなかいいでしょう。「見納めは医者鼻毛の二三本」とかね。ああいう句を詠んで死んでみたいもんだね。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

林 | 本当だねえ。昔の人は余裕があったような気がするね。死ぬことにもね。辞世の句を詠むだけの暇があったんだね。自分がいつ死ぬかわからないという死生観を反映したようなところもあったと思う。

岡本 | 死というものが非常に身近であり、多くの人が常に死というものに隣り合って生きていたような気がする。

「臨終力」を語る

林 | メメントモリというのかな。それは非常に大事なことだと思う。「みんな、辞世の句を読もうよ」というのも良いと思う。辞世の句を読むことで自分が死ぬということを具体的にイメージできる。肅々と死ぬことの

句でもよい、世の中を斜に眺めながら句を詠むのもよい。まあ、自分の人生を振り返って五七五あるいは五七五七七にまとめるというのは良い。そういう余裕は欲しいね。

岡本 | そういえば「臨終力」の中で、遺言を書いたということが出ていたね。僕も2年半ぐらい前に書いたんだけどね。まあ、財産の事を中心に書いたんだけど、それだけでは何か寂しい気がして、序文を書いた。書き始めてみるとこれがなかなか面白い(笑)。本当は、財産の処分だけを書いてもよかったんだけど、遺言という言葉の通り、「言」がなければいけないと思った。遺金ではないからね(笑)。「言」を書いてやろうと思って書き始めたら結構長いものになった。

林 | それは是非観たいねえ(笑)。

岡本 | いや、いや。それはダメです(笑)。

林 | 僕は毎年正月にそれを書いている。毎年、少しずつ変化する、考えが変わるからね。先日、

林望著「節約の王道」(日経プレミアシリーズより)

橘曙覧(たちばなのあけみ) 『独楽吟(どくらくぎん)』より

たのしみは妻子むつまじくうちつどひ頭をらべて物をくふ時
 たのしみは空暖かにうち晴れし春秋の日に出でありく時
 たのしみはまれに魚烹て児等皆がうましうましといひて食ふ時
 たのしみは心をおかぬ友どちと笑ひかたりて腹をよるとき
 たのしみは家内五人五たりが風だにひかでありあへる時
 たのしみは三人の児どもすくすくと大きくなれる姿みる時
 たのしみは小豆の飯の冷えたるを茶漬けてふ物になしてくふ時
 たのしみは欲しかりし物銭ぶくろうちかたぶけて買ひえたるとき



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

父が亡くなり、妻の父親も亡くなり、また妹も亡くなった。周りで多くの人が亡くなった。それを見ていて、ぼくは葬式などやらなくても良い、戒名もいららないと思い、全てそのように遺言に書いた。だけど、葬式をやるのは私の意図というよりは、お別れをしたい人もいるだろうと思うようになった。そうすると絶対にやらないと言うのも、かたくなしい話だし、まあ自然にね、大げさにならないようにやりたければやってくれと思い始めた。どうせ娘婿は牧師だから、それに仕切らせて、何教でやろうと死んだこっちには関係ないのでね。そんなことで葬式はやらんというのは取り下げようかなと思っている。

岡本 | 僕は戒名もいらないし、大げさな葬式もしないでもらいたいと思っている。墓も代々の墓はあるのだけれど、妻と僕が入る樹木葬の墓地を買った。ちょっと広めに買って、これはずっとそこに入るのだからそう考えれば結構安い買い物だったなと思っている(笑)。妻などは、いつの間にかいなくなっているのがベストだと言っている。

林 | いいねえ。

岡本 | 死ということについて、先日手術の時に非常に面白い体験をした。手術室に入り「はい、それでは始めます。麻酔を・・・」と言われた辺りでまったく意識がなくなった。もちろん、痛くも痒くもない、夢を見ているような意識もない。つまり、自分という存在そのものが全くなっている。時間感覚もない。そしたら遠くの方から「岡本さーん、聞こえますか」と言う声が聞こえてきた。「あれ？どうしたんだろう」と思って目を覚ましたら「もう終わりましたよ」と言われた。部屋の時計を見ると確かに4時間経過している。これは本当に不思議な体験だった。あのまま麻酔が覚めなかったら死んでいても気がつかない。何か死というものが恐ろしいものだと言う意識があまりなくなったような気がする。

林 | いい経験だね、それは。

岡本 | あの状態は瞑想的な境地とも全く違う。まあ、瞑想でそれほど深い境地に入っていないということもあるかもしれないけれど、何か根本的に違うような気がする。瞑想の先生にも聴いたけれど、やはり、はっきりした答えは得られていない。

林 | 死に際して天に向かって登っていき、大きな光が見えたとかいう話もあるけれども、そういう体験もないの？

岡本 | ないねえ。麻酔で意識を失っているのと、本当に死ぬという事はそのところで大きな違いがあるのかもしれない。ただ、自分がこの世から完全に消え去った時の体験というのかなあ、体験してるという意識もないんだけど、その状態を垣間見ることができたような気がする。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

林 | その後何か死生観のようなものは変わった？

岡本 | やはり自分にとって何が一番大切かということを考えるようになったと思う。人間は必ず死ぬわけだし、その点についてはリスクは無い。確実に起こる事象だからね。もう一つ、確実なのは「今、生きている」ということだ。これもはっきりしている。リスクがあるのは、この生きているという状態がどれだけ続くか、いつ終わるかということだ。そうすると、この「今生きている」というありがたい現実の中で、本当に自分がしなければいけない事は何なのかということを考えるようになったと思う。多くの方が、「病気をしたんだから、これから少しのんびり生きればいいのか」と言ってくれるけど、逆に生きているうちに何ができるかということを考え始めると、そのんびりもしてられない気がしてくる。ま、死というものがより身近に近づいたという事は言えると思う。

林 | そりゃそうだろうね。95、96歳などになって葬儀の時にみんなが「大往生ですね」というけれど、僕なんか父親と一緒に住んで面倒をみて、お袋もがんでなくなるのを見送り、全て僕ら夫婦でやったからね。そういうのを見ていると、それはちょっと無責任な言い方で、父が「大往生」で「立派な死に方でしたね」と言われるま



での10年位の間、僕らがどれぐらいバックアップをしていたかという事を知って欲しい。それは表立って大きな声では言えないけれどね。だから僕らも口を合わせて「そうでした、立派な往生でした」などと言っているけれどもね。果たして自分がそうなった時にそのようなケアを享受できるとは限らないわけだから、これも「地獄の沙汰も金次第」で自分がおカネを使って、介護付きのケアホームみたいなものに入るとか、何かイメージを作っておかなければいけない。漠然としているのがいちばん罪深いと思う。

岡本 | その意味では毎年修正するにしても遺言を書いておくという事はとても大事だと思う。その時点のベストの選択肢を書いておくことだね。

林 | そうだろうね。大事な事は、やはり一人で考えるのではなくて、配偶者と常に相談をするとい



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

うことだね。死んだら、こっちは責任の取りようがない。残された人がどうするかという問題だから。だから息子なり、娘なり、妻なりと常に互いにどうするかということを書面にして明確にしておくことが必要だ。例えば、延命治療をするかしないかということに関しても、ただ口頭で言ってるだけでは、証拠にもならないのでちゃんと書いておいてくれと医者の子に言われている。書面になっていれば、自分は医者だけれども、父がこのように意思を表明していますと言うことで、延命措置をつけないで済む。でも、そうではないと医者という立場からつけざるを得ない時も多い。

岡本 | 僕は尊厳死協会に登録をしている。とにかく、意図を明確にしておくことが必要だと思う。

林 | それはとても良いことだと思う。

岡本 | まあとにかく「元気で死にたい」ものだと思うね。「早寝早起き、腹八分目、酒はほろ酔い、色を慎め」というからね(笑)。

林 | 酒はもともと飲めないから、まあ、結果的にそうなってるかなあ。早寝早起きはちょっとダメだけどね、仕事上(笑)。

岡本 | まあ、お互いに10代から生きざまを眺めあってきて、そして今日こうやって「死に方」の話までするようになってきた。長い付き合いというのは本当にありがたいものだと思うし、まさに生きている価値がここにあるような気もするよ。まだまだ話し足りないこともたくさんあるけれども、それはまた次の機会にやりましょう。今日は忙しいところ本当にありがとうございました。